輝け商店街 (17)

近江商人の道・5

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

近江商人の教育

江戸時代の初め、武士から禅僧となった鈴木正三は、商人の生き方を説いた。利益を積極的に肯定し、職業生活の尊さを訴えた。

「身命を天道になげうって、正直に商いの道を進め。人々は自分の仕事によって仏になる」

商人の身分が低かった時代に、この教えが近江商人をはじめ、人々の大きな支えとなった。

近江商人は、丁稚奉公から始まって番頭となり、やがて別家に至るまで、徹底した規律があり、これを守った。その命をかけた真剣な取り組みに、現代の商人が学ぶべき、多くのものがある。

商人哲学

商いは仏の道
正直に商売に励め
禅僧・鈴木正三

雪の日や　あれも人の子　樽拾い

美濃の国、加納の藩主、安藤信友は、享保七年（一七二一）に老中となった。俳号を冠里といい、よく即興に句を詠んだ。

江戸城に出仕したある日、雪の降りしきる厳しい寒さのなかで、酒屋の小僧が、素足で空き樽を拾い集めるのが目にとまった。

「果たして、わが子に対して、これ程の厳しい境遇を強いることができるだろうか」

傘もささずに、とぼとぼと樽を担いで歩いていく姿。真っ赤にかじかんだ手。それをじっと見つめる瞼に浮かんだのは、わが子の姿だった。

この句には、わが子とよく似た年頃の小僧に向ける、優しい眼差しと、庶民に対する思いやりがある。それが、江戸の人々の共感を得た。

当時、低かった商人の地位が偲ばれる一句でもある。

商人と屏風は曲げねば立たぬ

江戸時代のはじめ、商人は、士農工商の一番下の地位に置かれた。中期以降、商人の実力が認められ、藩の財政をも支えるほどの力を発揮するのだが、初期での商人の社会的な地位は低かった。

それだけでなく、百姓や職人のように、自らは生産にたずさわらないで、ものを右左に動かすだけで、口銭をかすめる卑しい職業とされていた。「商人と屏風は、曲げねば立たぬ」とも言われた。

そんな時代に、「商人の道は正しい。正直に商売に励め」「それが、仏の道に叶う」と説き、人々の支えとなったのが、鈴木正三である。近江商人も、その教えを学んだ。

関ヶ原合戦の武士から禅僧に

時代は四〇〇年前にさかのぼる。鈴木正三は関ヶ原の合戦のあと、大坂夏の陣（元和元年・一六一五）に加わって、敵の首二つを討ち取るほどの活躍をした。

もともと、武門の誉れ高き家柄の出であった。

天正七年（一五七九）に、三河国加茂郡足助則定の城主の子として生まれ、元和五年（一六一九）には大坂城番として勤務した。

ところが、元和六年に四二歳で武士の身分も地位も捨てて、切腹を覚悟で出家してしまう。

以来、風呂敷一つ、杖一本の姿で諸国を行脚して修行を始める。

やがて、今の豊田市山中町に恩真寺を建て、そこを拠点に布教活動を行った。慶安元年（一六四八）に住まいを江戸に定める。

七七歳で生涯を閉じるまで、人々を導き、弁道、唱道、教化に身を捧げた。多くの寺院を建て、多くの著作を著している。

「商人日用」を著し商人の利益を肯定

鈴木正三が著した多くの著書は、商人道の発展と普及に、大きな役割を果たした。

「万民徳用」は仮名書きの優しい和文で、江戸時代の二六〇年間、庶民に親しまれた。商家の丁稚（でっち）の手習いや、寺子屋の読み書きの教科書として用いられた。

文字を覚えるだけでなく、処世訓も学ぶことができた。特に「商人日用」は、商人のあり方を指し示し、「商売をしようとする人は、

まず、徳利の益すべき心づかいを修行しなさい」と説いた。

「すべての職業が、仏のもとでは貴賤がなく平等である」

「仕事に打ち込むことが修行であり、仏になる道である」

というのである。

江戸時代に入って、長く続いた戦乱の時代が終わり、戦のない平和な社会へと転換した。武士は戦うことから、世の中を治める役人となった。厳しい身分制度が布かれ、農民、職人、商人は、その支配のもとに置かれた。

その時代に、商売の尊さを認め、仏の道に叶うものだという、積極的な商人肯定の道を指し示した。

武士道の精神と禅の思想を、農民、職人、商人にまで発展させ、農民は食物を生産すること、商人は物流を行うことが仏の道に叶うと、仕事に対しての積極的な意味づけを行ったのだ。

世法即仏法 仕事すなわち仏の道

・諸々の職人がいなければ、社会生活に必要なものが調達できない

・武士がいなければ、世の中が治まらない

・農民がいなければ、食物がない

・商人がいなければ、自由な物流が成り立たない

これら、すべての仕事に真剣に打ち込むことが、修行であり、仏の道に叶うもの。

仏教と日常の生活は同じで、それぞれの仕事の中に仏の道がある。どのような仕事も、みな仏の修行である。人々は自分の仕事によって仏になる。

こうした理念を打ち立てて人々に説いた。この思想が、商人の世界での実力主義の形成に貢献した。

やがて、石田梅岩の「石門心学」に受け継がれ、日本の商業発展の基礎となったのである。

仕事の意味を考えよ 自分の職業に打ち込め

鈴木正三の思想は、三つの柱から成る。

職業に貴賤はないという「平等観」。一生懸命に自分の役割を果たすことが、信仰そのものであるという「使命観」。そこから得られる利益を肯定する「達成観」である。

これらは、仏教の持つ重要な要素である。「仏は、もともと我らなり」。

仏は我々とは手の届かない、別の世界にいるのではない。我らも精進して仏の道に至るのだ。

現代風フレーズに直すと、次のようになる。

◇どの事業も仏道である。人々の仕事を成し遂げることで、仏となることができる

◇正直をモットーに、商売に徹すること。そこに神仏のご加護がある。取引相手もお客も その商人との取り引きを喜び、商売は繁盛する

◇自分の仕事・職業に打ち込むこと。その仕事の意味を考えて働きなさい。そうすれば、心の平安と、安らぎが得られる

◇身命を天道になげうって、一筋に正直の道を学びなさい

◇正直の人には諸天の恵み深く、神仏の加護があり、災害を除き自然の福を益し、衆人愛敬浅からずして万事が叶う

◇正直な商売をしていれば、その商人は福徳が充満する人となり、行住坐臥が、すなわち、日常の生活がそのまま禅定となって、自然に菩提心が成就する

鈴木正三の座像
―真理を見据えた厳しい風貌―
則定・心月院の所蔵
豊田市パンフレットから引用

鈴木正三をたたえ 多彩な記念行事

平成一七年は、鈴木正三の没後三五〇年にあたる。地元と豊田市、(財)豊田市文化振興財団など、地元の顕彰関係諸団体が中心となって、多彩な記念事業をくり広げた。

五月には、豊田商工会議所の企画で「鈴木正三物語」がプラザで上演された。六月二六日に、豊田産業文化センターで鈴木正三研究会総会が開かれ、記念シンポジュウムでは杉浦敬紀・横浜市立大学副理事長の講演があり、小堀桂一郎・東京大学教授らも参加した。

則定小学校では、郷土の偉人・鈴木正三に学ぶ活動が進められている。児童の合い言葉に「真心こ

めて力いっぱい」を掲げており、平成七年から、毎年五年生が学芸会で「鈴木正三物語」を上演し続け、今年で一二年目となる。脚本から演出、舞台装置まで、すべて児童の手作りだ。

正三が唱えた商人の道は、時代を超えて、ますます人々の心に響きを増している。行き先の見えない今こそ、しっかりした商人の理念が求められている。

「足助資料館」内に（豊田市足助町則定）、鈴木正三顕彰会がある。

教育に力を注いだ近江商人

寺子屋の普及 丁稚で商人の基本学ぶ

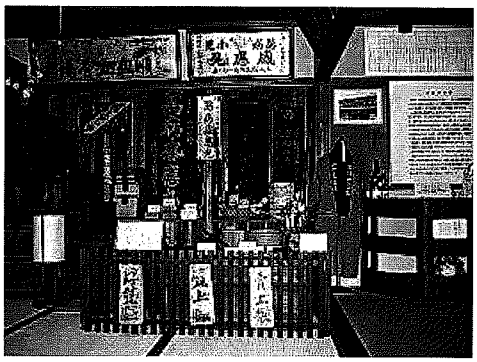
近江商人は、師弟の教育に力を注いだ。五個荘には、すでに江戸初期から寺子屋が開かれていた。

寛永一七年（一六四〇）に梅迺舎が、元禄九年（一六九六）には、「時習斎」が開校され、近江商人たちは幼少期に、ここで学んだ。

明治に入ると学校教育が盛んになり、滋賀県ではいち早く、大津県立商業学校、八幡商業学校が建てられた。商業に関する専門教育が教えられ、後の経済界で活躍した、多くの人物がここで学んでいる。

八幡商業学校は「近江の士官学校」と言われ、高度な実務の実習も行われた。

近江商人が全国に展開した出店で、働く店員の多くは、地元の近江で雇われた。一〇歳前後に丁稚として店に入ることは、「奉公に上がる」と言われた。近江の本宅で、商人の基本となる「読み、書き、ソロバン」を学びながら、掃除、子守、使い走りをして行儀見習いをした。



再現した日野の商人店
―滋賀県日野町にて―

きびしい躾が商人を育てる

奉公人は「奉公人請状」の定めに従った。

・丁稚は火鉢にあたらない
・使いの外出で知人に会っても、無駄な話しは厳禁
・店に関することは口外せず、早々に帰店する

こうした決まりを厳しくしつけられた。無給で、盆・暮に小遣い銭と「仕着施」が支給された。

仕着施は年二回支給される衣服で、古くなると帳場に申し出て、新しく作ってもらい、支給品と別の衣類をこしらえたときは、必ず帳場を通して、店からの借用の形をとった。

断りなしに、気儘な衣類を着ることは許されず、時々、所持品検査も行われた。夏冬ともに木綿縞、冬物の裏地は千草色（淺黄色）に決まっていた。

その限られた見習い期間中に、商人としての才能があるかどうか見分けられ、見込みがなければ、里に戻された。この間の教育訓練は、主として店主の妻が担当した。

故郷に戻る在所登り 情報連絡も

丁稚は五年間、ひたすら勤めに励み、初めて郷里へ帰ることが許された。これを「初登り」という。

初登りには、店からは小遣いや土産が渡され、帰り路に、まず、近江の本宅を尋ねて、主人と夫人に挨拶をし、本店では、各地・各店の情報を報告した。

その後、認められた者だけが、

教育と秩序・近江商人の立身

寺子屋
↓ 商家へ奉公
丁稚
・奉公人請状
・厳しい躾
・店の雑用
↓ 5年目にはじめて帰郷
初登り → 〈退職〉
↓ 元服後に昇進
手代
・番頭の指図で出納・記帳・販売に当たる
・給金が定まる
↓ 隔年登りから毎年登りへ
番頭
・店の経営・仕入れ
・奉公人の指揮監督
・給金以外に報奨金
↓ 独立を許される
別家
・家名と財産を分与
・主従の関係は続く
・妻帯し世帯をもつ

再勤が許されて、店に残された。

一七、一八歳になると元服し、羽織の着用や酒・タバコを許された。元服後に、やがて手代に昇進する。番頭の指図で、出納・記帳・販売など商いの本筋に携わり、給金が定まる。この頃から中登りの後に二、三年に一回の「隔年登り」となるのである。

番頭から別家後の主従関係

番頭に昇進すると、店の経営、家事の切り盛り、奉公人の指導・監督に当たった。その手腕ひとつで、店の盛衰が左右し、責任は重かった。方針を誤り、私欲を謀ったりして、店を閉めた例も少なくなかった。労苦に報いて給金のほかに、報奨金も支給された。郷里に毎年帰省することができる「毎年登り」が許された。

こうして無事に務めを果たすと、別家を許された。本家から家名と財産を分与され、独立した。妻をめとり、世帯を持った。

別家に際して、元手金（開業資金）として、退職金や給与積立金が支給され、褒美金も授けられた。「別家証文」をしたため、別家の後も、本家との主従関係は続けられた。

理念と戦略が盛衰を分ける

「職業と信仰は一つ」であり、「真剣に商売に取り組むべし」と説いた鈴木正三の思想と、近江商人が教育と規則の中に活かした一面を眺めてみた。

身を削って励んでも、すべてが成功し、大店を築いたのではない。生涯うだつが上がらず、貧困のまま終わった者も多い。

また逆に、祖先が営々として築いた身代を、乱行によって持ち崩す者もいた。近江商人もまた「長者三代」の例外ではなかった。

鈴木正三の商業哲学から何を学び取るべきなのか。歴史などあまり興味がない、仏とか修行とか、規制のきびしい丁稚修行とか、いまの時代に合わないと一笑に付されるかもしれない。だが、揺るぎのない理念の追求を怠り、時代にふさわしい戦略を欠いた企業が、いかにもろいものか。

理念に対する無関心さが、小売業衰退の原因の一つにつながっているのも、まぎれもない事実である。